札幌市環境プラザ運営協議会　平成 31（2019）年度第 2 回実施概要

１　日　時　　令和元年 11 月 27 日（水）19：00～21：00
２　会　場　　札幌エルプラザ公共 4 施設 2 階　会議室 1・2
３　出席者
（１）委　員：伊井委員、一林委員、新保委員、三輪委員、皆川委員、山本委員、
高松委員、齊藤委員
（２）札幌市：環境局環境計画課環境教育担当係長、環境計画課推進係 係員
（３）事務局：（公財）さっぽろ青少年女性活動協会　市民活動担当課長、環境係長、
主任指導員、指導員、サポートスタッフ

４　会議次第
（１）開　会
（２）札幌エルプラザ公共４施設館長　あいさつ
（３）委員近況報告
（４）・平成 31（2019）年度報告（中間報告）
・その他
（５）札幌市環境局環境活動推進担当課長　あいさつ
（６）閉会

５　議事概要
（１）平成 31（2019）年度報告（中間報告）　事務局から平成 31（2019）年度の報告を行った。

Ｑ　施設見学に関して児童会館やイオンチアーズクラブの利用件数が増えているようだが何か工夫があったのか
Ａ　今年度は見学の利用が全体的に増加している。学校の利用では学年や学級単位の人数の多い利用が減っているが、中学生ではグループ学習など少人数での利用が増えている。各団体に対して、特に PR しているわけではないが、イオンチアーズクラブについては、この３年で急に増えている。各クラブ間の情報交換があるのではないかと想像している。チアーズクラブ全体で毎年テーマを設定しており、何かしなくては、という時に頼ってくれているのではないだろうか。児童会館については、北大の博物館の前後に寄ったり、長時間滞在したりと、それぞれの活動に合わせて利用しているようだ。
Ｑ　特集コーナーに関してはプレスリリースされているのだろうか。
Ａ　環境プラザのホームページに内容と展示期間を掲載している。
Ｑ　環境教育リーダーの派遣について、派遣先の内訳を教えてほしい。施設見学では小学校の利用が減っているが、環境教育リーダーの派遣では増えている、というような現状を、計画策定の際に勘案できるのではないか。
Ａ　学校、保育園、児童会館が多い。また、大人の自然観察グループなどは毎年度同じ団体がリピート利用している。

Ｑ　「こども環境コンテスト 2019」について、発表団体はどのようなところか。札幌市全体は難しくても、積極的に取り組みを進めると、小・中学生の意識が大きく変わると思う。

Ａ　児童会館や地域の団体、小学校、中学校が発表団体である。自発的な応募もあるが、札幌市教育委員会では札幌らしい教育の実践校を指定しており、活動の成果を環境コンテストで発表することになっている。そのことが活動の動機づけにもなっている。

【ご意見】

○　見学利用数といった数値は数値で必要だと考えるが、それよりも広がりや定着が認められるものを数値と同じレベルで表していくことが必要ではないだろうか。毎年同じところが来ているのか、広がりがあるのかなど環境プラザが市民にとって必要な場所であることを示していくといいのではないか。

○　運営の本来の意義と数値指標のバランスを取ることが必要だろう。

○　以前特集コーナーで、海洋ゴミの展示をしていた。世界の国では歴史的、文化的にもごみを海に流しているということもある。さまざまな展示において、国際的に見た日本とほかの国との違いなど、広い視点がとり入れられていると面白いと思う。

○　SDGｓの取り組みについては、17 の目標に対して、地域ごとに捉え方が違う。そこが出発点になって面白い展示につながるのではないか。

事務局　　SDGｓという言葉を知った後、それからどうしようということにつなげるのが大事だと考える。自分たちでできないことは、他の力を借りながら展示等を展開していきたい。

○　エコクラブ支援に関する報告に関しては事業回数ではなく、一連のプログラムをコーディネートしたことの意味合いの方が価値があると感じる。報告の際に工夫をすると、実施した意義がより伝わるのではないだろうか。

○　事業報告に関しては、今回力を入れた部分、その理由などを含めて表記していくことが重要になってくるのではないかと思う。

（２）指導者向け研修について

○事務局　　指導者向け研修について、「指導者」という対象を環境教育の実践者、教員や保育士といった枠を超えて考えている。環境保全の取り組みを広げる人を増やすために、１対１ではなく、たくさんの方に伝えることができる、影響力のある立場の方ととらえていきたい。町内会の役職者や大学の学生役員なども対象とし、いずれそうした方々の連携が生まれればうれしいと考えている。そうした方向で良いだろうか、ご意見を伺いたい。

【ご意見】

○　札幌市では町内会を活性化させるべく工夫をしているが若い方の参加がなかなかない。若者と町内会がつながり、環境問題の解決につながるとしたら、いい話だと思う。

○　一つのテーマについて参加者に取り組んでもらう際に、広がりのあるものにして、詳しい人に話題提供してもらう、ということを伝えた方が多くの参加者が得られるのではないだろうか。先を見据えていろいろなものを提案し、今回はそのうちの一つだという展開が良いのではないだろうか。

○　教育現場ではキーワードの一つに「社会に開かれた教育課程」というのがある。学校の願いや行っていることを保護者や地域に知ってもらい、共有することが重要と考えている。加えて、例えば、保護者や地域の得意分野を持ち寄ってみんなで子どもを育てていこうという意味で考えると、指導者の枠を少し広げて考えるのは、学校教育の方向性ともあっているのかなと思う。また、学校の先生にとって授業ですぐに役立てられる小ネタなどが得られたらいいなと思う。

○　教員は免許更新講習の受講が必要で、何かおもしろい実践的な研修を求めている。そういったところから広げていくことも可能性としてはあるのではないか。

○　一つのことを接点として、どれだけほかのものを広げていくかという視点でも考えられる。例えばイオンチアーズクラブのような企業の活動が何を求めているのか、企業外に頼りたいところはどういうところなのか、そこを環境プラザが今後コーディネートしていくので一緒に考えましょうと、特定な人に向けた研修というのも一つの方法だと思う。ねらいを元に進む方法、対象者を定めて課題解決をしていくもの、などという方法もある。重要なのは受講者がどのように衝撃を受けてその後どうするかは、受けた人任せであり、実施者はどこまで受講者の心を揺さぶるものを提供出来るかが全てである。

○　指導者向け事業をしながら、指導者間のつながりを作る目的もあると思うので、まず環境プラザがつながってそこから視野をひろげていくと事業もどんどん広がっていくのではないかと思う。また、組織内にも資源はあるのだというところにも目を向けながら今後の計画を立てていただきたい。